

異文化共生における心理学視点からの示唆

田中 共子

1. 文化を扱う心理学におけるいくつかのスタンス

(1) 現研究領域における展開

本稿は学際領域となる文化共生学に対して、心理学の立場からどのような示唆が可能かを、現在の心理学の研究領域を整理しながら考えてみようとするものである。文化を扱う心理学的な研究上の立場には、実際のところ多様なものがある。そもそも心理学と一口に言っても、例えば2002年の日本心理学会年次大会の発表会場は18に分化しており、つまり主要な研究領域だけでもこの位は挙げられる(日本心理学会第66大会発表論文集より)。具体的に列挙するなら、原理・方法、人格、社会・文化、臨床・障害、犯罪・非行、数理・統計、生理、感覚・知覚、認知、学習、記憶、言語・思考、情動・動機づけ、行動、発達、教育、産業・交通、スポーツ・健康となっている。

これらの領域ごとに「文化」の変数を組み込んでいけば、それだけで研究として成り立つものも多い。例えば、あるパーソナリティテストによって測定される「人格」的特徴が別の文化圏ではどのように異なった分布を示すのか。日常的に用いている「言語」の種類によって、脳内での言葉の認知的処理の過程はどのようなパターンを描くのか。外国の学校で学齢期を過ごした子供が、帰国後に母国の学校「教育」場面に、どのようになじんでいくのか。日本と米国の乳幼児への養育行動の差から、どのように「発達」の違いを説明できるか。多国籍企業でのリーダーシップは、支社がある国での「社会」と文化に合わせるほうが効果があるのだとしたら、本社からの派遣社員は現地でどのような態度をとったらよいのか。

こうした研究的立場は、それぞれの領域名のもとで、〇〇における文化的要因の影響に関する考察、文化的多様性に関する実証的研究、文化間移動と適応過程などの題のもとに発表される傾向がある。文化は人間の行動に影響を与えている、あるいは組み込まれてきた、社会的環境の一変数として、人間の心理と行動に対する従来の研究的知見に厚みを加えるための考察の対象となっていると考えられる。

(2) 文化への二種類のスタンス

上記のように、伝統的な領域に文化の変数を組み込むという考え方の他に、「文化」という要因をどう扱うかというスタンスから、おおまかな分類をすることもできると思われる。大きく二つに分けて、文化を事象の原因として主役にするか影響要因として脇役にするか。あるいは文化

間の接触や関係といった縦断的で動的なダイナミクスを扱うか、比較を中心にすえた横断的で静止的な視点に立つか。または個人の適応・不適応や自己実現や関係性を扱うか、何らかの文化を共有する集団の平均値的プロフィールに主たる関心を寄せていくか。これらは必ずしも明瞭に区分されるわけではなくて、渾然一体となった研究もありうる。ただ前者と後者の力点の置き方について、英語で言うなら "cross-cultural psychology" と "cultural psychology" のニュアンスの違いとして感じ取る人もいる。前者の日本語訳は、比較文化心理学、異文化間心理学、交叉文化心理学、交差文化心理学などとされる傾向があり、後者はシンプルに文化心理学と称されて文化人類学を彷彿とさせることが多いのではないと思われる。

(3) 学会や雑誌における呼称例

現実には、比較によって特徴を明らかにしながらダイナミズムを読み解いていく混合領域もあるので、用語の整理はいささか難しいように思う。文化間の「比較」も「関係」も扱う媒体の場合、例えば日本の「異文化間教育学会」は、現在は英語名として Intercultural / Transcultural Education という二語併記を用いている。1987年の学会誌の第一巻では、Intercultural Education となっていたのだが、概念的な確さの観点から後日追記されたものと聞いている。交差的な比較に留まらず、移動による関係性の変遷と、その教育応用的なコントロールの方策に注目するという意味が強められたようである。各国の教育体制を比較検討する比較教育的な視点から、教育場面の異文化接触や異文化滞在者の教育の仕方を扱うに留まらず、異文化との対応能力を教育によって育てていく姿勢を強めていこうという考え方が背景にあったものと思われる。つまり差異を明らかにするという学問的興味の発展型として、関係の調整を意図する現実への志向を強めていったのではないかと考えられる。

なおこの学会員は、教育学（教育社会学、比較教育学、留学生教育、帰国子女教育など）、言語教育学（日本語、英語など）、心理学（発達心理学、教育心理学、臨床心理学、社会心理学など）、社会学、コミュニケーション学などの研究者・実践家からなる学際的な構成をとっている。「文化」をキーワードに教育問題を考えていくという意図は一致しているが、研究手法は多様性に富んでいる。異文化接触や文化間比較にテーマを絞って、学際性を加味して、問題解決を追求していく領域の一つの例とみることができよう。

著名な英文誌の例を挙げれば、"Journal of Cross-cultural Psychology" という雑誌が世界中で読まれているが、この中では比較も関係も扱われている。"International Journal of Intercultural-relations" という雑誌では、主に関係系の研究が掲載されている。"Journal of Intercultural Communication" になると、関係・接触を扱う論文で、しかも意志疎通に焦点をあてた研究が多くなる。しかも心理学者よりも、応用言語学など他の領域の執筆者が目立つ。異文化間の「交流」を主として扱う学際領域といえよう。

現実の世の中で異文化接触の機会が増えるほどに、「従来の領域から手の出せる範囲に文化の

要因を組み込む」というスタンスから、「現実の異文化接触をどのように調整していくか」に注目を強め、関係性の学問へと向かっていく流れがあるように思われる。そしてそこでは、現実の事象を背景にするがゆえに、隣接領域との接点が積極的に探られていくようである。

また、文化は多様であるという認識をより強調する立場からは、「異文化」は一对一の関係を連想させるとして、それに代えて「多文化」という言い方を好む人々もいる。例えば多文化間精神医学会、多文化関係学会という団体も存在するし、領域名として異文化間カウンセリング(cross-cultural counseling)ではなく多文化間カウンセリング(multi-cultural counseling)を提唱する人々もいる。これまでのところ、ニュアンスは異なっても実用上は異文化と多文化の差異は少なく、異文化という呼び方の方が多用されているようである。

2. 文化に関する一般的な心理学的知見

(1) 教科書の例

文化に関する心理学における比較的まとまった知見を概観する例として、アメリカなどの大学でCross-cultural Psychologyの教科書として使われる、“Human Behavior in Global Perspective: An Introduction to Cross-cultural Psychology”(Segall, Dasen, Berry and Poortinga, 1990)の中身を見てみよう。日本語版は、日本人読者に受け入れられやすいように、あえて英語版とは目次構成を入れ替えて出版されているので、以下では日本語版をもとに述べる。この書では、cross-cultural psychologyを比較文化心理学と訳しており、目次は表1のようになっている。

まず人間の心理と行動がいかに社会文化的に規定されているものを説き、文化の要因を組み込んだ人間理解を提案する。バックグラウンド変数(生態的文脈、社会政治的文脈)を受けて生物的適応・文化的適応が導かれ、そこにプロセス変数として遺伝的伝達や文化的伝達の影響、および生態的影響や異文化化が重ねられていった結果、心理学的な結果(特徴、行動)が生じると述べている。従来の心理学が西欧的発想で形作られ、西欧の文化的背景を雛形に発展したという歴史に対して、本書は反省的である。著者らは、他の文化での発見を加え、人類における普遍性の検討を経れば、心理学が真にとぎすまされて行くはずだという希望を持っている。

異文化共生に関して直接的な示唆を与えてくれそうなのは、表中ではPart IIの部分であろう。6章、7章は、他の集団に対して人間がどのような心理状態になるかを原理的にまとめ、他の文化集団に対する態度に当てはめて考えていく。そしてそれをコントロールするにはどのような心理学的な方法があるのかを探る。5章では、地理的分布という水平レベルの差異ではなく、近代化という時間軸に即した差異を扱っており、近代化と伝統文化の調和を考えるのに示唆的な知見を紹介している。14章は、男性と女性の共生を視野に入れている。15章は、攻撃行動の発現を避けて平和を構築していくために、示唆的な知見かもしれない。

本書に応用的知見が希薄なことは著者らも記しているが、他の書籍に譲るそうした主題の例と

表1 Human Behavior in Global Perspective: An Introduction to Cross-cultural Psychology
(Segall, et.al, 1990) の目次 (構成は日本語版による)

Part I 比較文化心理学への招待	9-4 伝統的教育のフォーマルな側面
1章 人間の社会的文化的性質	9-5 まとめ
1-1 行動と文化	10章 人間の発達についての理論
1-2 バランスのとれたアプローチ：異文化化の概念 枠組み	10-1 Witkinの心理学的分化理論
1-3 社会化と自文化化	10-2 Piagetの理論：具体的操作と形式的操作
1-4 行動の決定因としての文化の概念	10-3 まとめ
1-5 私たちの比較文化的見解のまとめ	11章 認知のプロセス
1-6 この本の構成	11-1 なぜ認知を比較文化的に研究するのか
2章 心理学におけるグローバルな視点：簡単に歴史をふりかえって	11-2 カテゴリー化
2-1 グローバルな視点の必要性	11-3 分類
2-2 西欧心理学の歴史に見られる比較文化についての関心	11-4 記憶
2-3 比較文化心理学の近年の発展	11-5 問題解決
3章 比較文化心理学はどのように研究されるのか	11-6 読み書きと学校教育が認知に及ぼす影響
2-1 比較文化心理学の研究範囲：取り上げる問題	11-7 まとめ
2-2 比較文化心理学の方法論：問題とその解決	12章 日常生活の認知
4章 知覚の認知：比較文化心理学の方法論のケーススタディ	12-1 はじめに
4-1 はじめに：なぜ認知を比較文化的に研究するのか	12-2 毎日の生活の民族誌学
4-2 錯覚という知覚における文化差	12-3 認知文化人類学あるいは民族科学
4-3 まとめ	12-4 日常生活における算数
Part II 流動する文化と接触する文化	12-5 転移と一般化
5章 文化変容と近代化	12-6 学習のプロセス
5-1 なぜ文化変容を研究するのか	12-7 教育への応用
5-2 文化変容に対する個人の反応についての一般化	12-8 まとめ
5-3 文化変容モデルと近代化プロセスのいくつかの理論	Part IV パーソナリティと社会的行動
5-4 近代化の測定	13章 動機、信念、価値における文化的差異
5-5 近代化についての実証的測定	13-1 はじめに：なぜ価値を比較文化的に研究するのか
5-6 まとめ	13-2 個人主義／集団主義と分配状況における公正さ
6章 小さくなりつつある世界における文化間関係	13-3 協同と競争
6-1 はじめに：内集団と外集団	13-4 達成動機
6-2 自民族中心主義	13-5 報酬の期待とその他の時間的な価値
6-3 国家主義の心現的要因	13-6 他の行動傾向
6-4 外集団の関係	13-7 まとめ
6-5 いくつかの結論と試験的な規定	14章 男性と女性、そしてそれらの間の関係
7章 結論	14-1 はじめに：なぜ、性とジェンダーを比較文化的に研究するのか
7-1 社会文化的文脈の重要性について	14-2 心理学的な性差
7-2 修正された生態・文化的概念枠組み	14-3 男子と女子の社会化の違い：なぜ、その違いが起こり、またその結果どのようなことが起こるのか
7-3 比較文化心理学と主流心理学との関係	14-4 性の同一性：さまざまな文化における男性と女性の自己知覚
7-4 比較文化心理学の未来への展望	14-5 性役割のイデオロギー：男女関係の比較文化的パターン
Part III 文化と認知	14-6 人間のセクシャリティに関する社会文化的理論
8章 人間の能力についてのもう一つの考え方	14-7 まとめ
8-1 能力を比較文化的に研究するときの問題	15章 文化と攻撃性
8-2 能力についての文化特有の定義	15-1 はじめに：なぜ攻撃性を比較文化的に研究するのか
8-3 知能テストの得点を欠損と解釈するか相違と解釈するか	15-2 攻撃性に適用される比較文化的研究の方略
8-4 まとめ	15-3 中心的テーマ：攻撃的な行為を生じさせる諸要因
9章 発達のニッチ	15-4 ジェンダー、社会的学習、そして攻撃性
9-1 なぜ発達心理学を比較文化的に研究するのか	15-5 まとめ
9-2 発達のニッチ	
9-3 インフォーマルな教育	

して、健康心理学、組織心理学、文化間コミュニケーション、民族集団、少数民族の問題を挙げている。

もう一つの書籍例として、表2には "Culture and Psychology : People Around the World" (Matsumoto, 1996) の目次を挙げておく。著者はアメリカの大学で教鞭をとる日系アメリカ人である。これにも日本語版があるので、それをもとに述べてみよう。

表2 Culture and Psychology : People Around the World (Matsumoto,1996) の目次

(表記は日本語版による)

<p>第1章 比較文化心理学への導入 心理学とはいったい何なのか 科学における知識と真理の創造 心理学における調査のプロセスを理解すること と 比較文化研究と心理学 比較文化心理学の影響：多文化的観点を持つということ 本書の目的</p> <p>第2章 文化の理解と定義 文化を定義することの重要性 日常用語における「文化」という用語の使用 文化の定義 文化と多様性 普遍的文化の原理対文化特有の相違：エミックとエティック 自民族中心主義とステレオタイプ（固定的概念）への導入 文化を測定可能な構成概念に変えること 文化の多様性における重要な「次元」の追求 心理学における文化の影響 結論</p> <p>第3章 文化と自己 文化と自己概念 自己における異文化的概念化の一例：「自立している自己」と「相互依存的な自己」 批判的思考および自立した自己と相互依存的自己の分析評価 自立的観点からの自己解釈と相互依存的観点からの自己解釈を越えて：相関した自己概念と孤立した自己概念 多文化アイデンティティ 結論</p>	<p>第4章 文化と発達 「自文化」化と社会化 発達における文化と心理学的プロセス 結論</p> <p>第5章 文化と感情 生活の感情の重要性 文化と感情の知覚について 文化と感情経験 文化と感情契機 文化と感情評価 文化とその概念と感情のことば 総括</p> <p>第6章 文化と言語 言語と言語習得の要素 文化間の言語の相違 言語と世界観：言語相関性の例 バイリンガルにおけることばと行動様式 結論</p> <p>第7章 異文化間コミュニケーション コミュニケーションの定義 コミュニケーションを構成している要素 コミュニケーション・プロセスにおける文化の役割 同一文化内コミュニケーション対異文化間コミュニケーション 効果的な異文化間コミュニケーションに向けて</p>
--	---

ここでは先の例と比べて、言語やコミュニケーションという意志疎通に対する、より積極的な

言及が見られる。言語と世界観に関して、言語学者にとっては有名な「サピア・ウォーフの仮説」が、初期の研究から支持・不支持の研究結果、最近の研究知見に至るまでまとめられており、バイリンガリズムの研究もこの仮説との関連から論じられている。コミュニケーションに関しては、符号化と符号解読（エンコーディングとデコーディング）という基本的な視点を出発点に、言語的・非言語的な文化的影響を論じている。伝達経路、シグナル、メッセージなどのコミュニケーションの要素に分けて論述していき、コミュニケーション学との接点に注意が向けられている。同一文化内の現象を基本に展開されてきたコミュニケーション研究の理論が、異文化間という設定ではどう異なっていくのかを整理し、異文化間コミュニケーションの能力や感受性、障害、摩擦とその対処法について述べている。本書ではよく「アメリカでは…」という記述が登場する。文化的普遍性と文化的特徴に関する記述をたどりながら、アメリカ人の特徴がわかりやすく呈示される。アメリカ人についての知識がこうして世界に広まるわけだが、他国においてはその国の人々の特徴を想起しながら読むべき書物であろう。

(2) 課題をめぐって

文化関連の研究を現実的問題レベルとしてとらえ、学際性を伴った領域として発展させて行くなれば、心理学者には上記にあげたような主題に関する一般的知識が期待されるだろう。もちろん心理学の持つ実証性を生かした調査・実験の手法などを応用していけば、上記以外のことが明らかになる可能性があるし、また他の領域の関心や手法との組み合わせ次第で、新しい研究領域が誕生することも考えられる。知識、手法、着想のいずれの面からも、学際研究は新しい可能性に満ちていると思われる。

ただし上記の cross-cultural psychology の書物を見て感じるのは、この領域の定番の知見や新しい情報をまとめた書籍でありながら、データや研究蓄積がやはり欧米中心であり、他の文化圏からの積極的発信が待たれているのではないかという点である。これが文化に関する心理学的研究の今の課題ともいえるだろう。これまでのところ重要な研究的概念は、欧米で案出され、他の地域でも適用が試みられ、その結果に統計的差異が見いだされたかどうかという着眼が多い。概念を起こすところから他の地域で生成された研究の、絶対量が少ないのである。言い換えれば、西欧的価値観で析出できるところしか、研究として汲み上げられにくい傾向がある。それは一流誌が多く欧米で編集されていることとも関係がある。もし、他の地域には特徴的に存在しているが西欧には希薄な心理学的概念があって、それが提案的に述べられたとしても、それが西欧人の十分な関心を引かないなら、ローカルな着想つまり地域研究や民族研究として処遇されることもあり得る。普遍性をアピールせずに特異性をアピールしていく方略をとると、それに対して寄せられる関心が少ないがゆえに、欧米からの手応えの薄い反応しか得られない、という結果となる恐れもある。

欧米人にとって発見的であったり、有用な工夫につながったりするような研究であれば関心を

持たれると考えて、そのような記述に配慮した書き方も見受けられる。欧米での有用性とは別に、本質的に興味深い主張ができる場合は、従来の知見にどのように建設的議論を加えられるかを、学問的に真摯にアピールする。他地域からの発信の戦略としては、これらが頻用されているロジックと思われる。こうしたことの根本には、研究の求心力における文化的偏りの問題があるが、ただし近年では非欧米圏での英文雑誌も増えてきている。読者層の拡大に伴う、広範囲への発信機能の拡大が期待されよう。

加えていうなら、文化間比較を中心的目的に据えた研究の場合は、欧米の概念が他の地域にどの程度あてはまるかという着想に偏るのではなく、他の文化圏で提案された概念が欧米にどの程度適用可能かという、従来とは逆の経路の比較の試みも、もっと行われるべきだと思われる。研究の先進性と、概念の文化的妥当性の問題を切り離すのはまだ困難なことかもしれないが、まずは比較研究によって差異の存在を提示することで、多様性・異質性への認識を高めた上で、各地からの質のよい発信が増えていくことが待たれる。最終的には、差異を論じることを越えて、統合的な理論モデルを提案できるのが望ましいであろう。そのころには、各文化の特徴や対応関係といった各論に基づく応用的展開への道もより開かれているだろう。

もっとも、心理学の一般的法則性を通文化的に求めようとする研究に比べれば、異文化交流、異文化接触、異文化適応などの研究では、文化的な相対性という観点は確保されやすい。滞在先の文化と母文化の対比を前提として、受け入れ社会の特質をからめて論じていく必要があるので、これらの特徴を十分把握することが尊重されるからである。移動元と移動先の文化の対応の数だけ、研究パターンがあるともいえる。ただしこの領域でも、「文化特異的」な部分と「文化一般的」な部分に、得られた知見を分けて論じていくことが必要になる。異文化接触や異文化適応の、文化に限らない一般的な知見とは何であり、各文化のバリエーションがどう現れる仕組みになっているのか。多様な研究対象を得るほどに、このあたりの知見がまとまりをみせて、より理論化されていく可能性があると思われる。

方法論的な観点からみるなら、文化的文脈を十分取り入れて研究を起こしていくという意味で、心理学における質的研究の意義がもっと強調されてもよいだろう。すでに開発された質問紙を別の場に適用するスタイルの調査研究では、オリジナルの質問項目に含まれていなかった概念は測定できないという限界がある。質問紙づくりから多文化スタッフを集めておけば、この問題はある程度解決する。しかし別の文化圏での心理と行動の理解において、既成の物差しを一律に適用するという方法には少なからぬ制約が内包される。最近では、文化間比較のための統計的工夫も提案されるようになってきてはいる。しかし、そもそもある文化圏で提案された概念が、別の文化圏ではどのような意味を持っているのか、文化的文脈に照らして妥当なのか、説明できる範囲がずれているならそれはどのような点なのか、といった概念的検討が必要であろう。各文化で仮説を生み出す部分を大事にするため、また文化的妥当性を丁寧にみるためには、仮説生成的研究に

強く、そして文脈を含めて検討できる質的研究の手法が効果を持つ可能性がある。量的研究は従来の心理学の中核的技法ではあるが、質的研究の活用は興味深い工夫の一つと思われる。

3. 文化共生に向けての若干の考察

(1) 共生に関連する研究主題の整理

文化共生に関して、心理学的な立場がどのように貢献できるかを、現状と今後の展望を合わせて少し考えてみたい。まず現在の知見を、どのように適用できるかという観点からみてみよう。以下では、社会心理学で意識されるような、現象を切り取るレベル別に整理してみる。

「集団レベル」のできごとについては、異文化集団間の心理的關係や係争メカニズム、社会内の偏見やステレオタイプの発生、差別現象の発現過程に関する解説が有用かもしれない。これらは社会的なできごとの根底にある、人の心のからくりを解き明かすものである。社会の営みが人間のなすことの集積である以上、人間の心理的な反応の特性が背景にある。究極的には、よくも悪くも人の自然な、そして正直な反応パターンに支えられている。つまり、これはこうあるべきだとか、理想はこうだとかいった「べき論」ではなく、むしろ人間の「本音」に基づく行動の解明に迫れるところが、心理学のスタンスである。人間は理論的にのみ動くものではなく、まして倫理や規範のみによって動けるものでもない。その判断には、常に心理的なゆがみというフィルターがかけられている。それは不安、恐怖、愛着、好悪などの感情かもしれないし、認知の内容、関心の有無、期待や意志や特定の態度かもしれないとみる。

より大きな「社会レベル」でみていくときにも、マクロな社会現象の読み解きに対して、集団心理の説明概念が適用できることがある。パニックや流行、政治や投票など、社会レベルでの人の動きは、広く心理学の研究対象である。例えば経済学への適用は、心理経済学として知られている。国家間や民族間、文化間の関係に、心理学の理論や視点を当てはめる試みがさらに展開していくかもしれない。

よりミクロに、「対人関係レベル」や「個人レベル」では、異文化滞在者の社会的・心理的インパクトの解説と滞在者の適応、周囲の人間の安寧や成長、相互理解の成立や友情形成などが研究されている。これらは現在進行中の身近な、いわばミクロの共生現象をひもとく視点である。個人の問題を社会の問題に還元してしまうのではなく、個人としての対応の方法があり、問題解決に動くことができるのだという視点は、個人の幸福を直接的に増加させる視点としての有用性を備えている。国際的な流動性が増した今日では、留学、派遣、滞在、旅行、移民、国際結婚その他、個人の遭遇する異文化接触の機会は増えており、研究ニーズも増してきている。

上記は cross-cultural psychology の中でも、関係・交流系の研究と関連が深いものが多い。しかし比較系の研究も、応用領域と積極的に結びつけていく努力をすれば、新たな展開をもたらす可能性があるだろう。例えば言葉の認識の仕方が言語によって異なるとしたら、それをもとに新しい

語学教育の方法が編み出されるかもしれない。心理学の狭い世界での理論的解明への評価に満足するのではなく、他の領域と結びついていく志向性を同時に持つなら十分に可能なことであろう。

(2) 隣接領域との対話から

最後に今後を考える手がかりとして、隣接領域の研究者と語りあう機会を持ったときのことを述べておこうと思う。筆者は以下のような話をしていた。「最近の心理学は欧米中心を脱しようとして、他の地域で知見の洗い直しをしている。心臓血管系の疾病の発病に関わる心理的因子である、攻撃性と時間的切迫性が、東洋でも同じ説明力を持つかどうか、シンガポールで実証研究が行われた。その結果、疾病予測因子の民族集団間の差が発見された。欧米人を基盤とした心理学モデルは、修正されていく必要がある」

しかし人類学者からは「民族間で違いがあるのは当たり前で、人類学ではそれは前提でしかない。それだけでは意味がないのではないか」ということを言われた。心理学上のバリエーションを明らかにしようとする比較研究に、どういう意義や新鮮味があるのかという問いである。

そこで、「ハワイの日系人を対象に、価値観と食生活のアメリカ化が進むほど、ある病気の罹患率が高くなることもわかっている。文化の変容と結びつけて、健康心理学的な説明が試みられれば、欧米モデルを脱した予防策を講じる手がかりになる。基礎データが貯まれば、その地域にあった健康政策を作ることができる」と、この種の研究の意図を説明してみた。

しかし、「その文化らしさを発揮した結果、ある病気になるのだとしたら、病気の予防のためといってそれを止めてよいのだろうか」と問われた。

それで、「確かに、違いをどのように対策に生かすかは、まだ議論しているさなかである。文化的性格のようなものを、変化させる権利があるのは、自分の健康に責任を持つ本人であろうと考えれば、個人に自分の行動選択をしてもらってはどうか」と答えた。

同席の社会学者からは、「ある国に移り住んだ一世、二世、三世の研究をみていると、一世が母国の文化的アイデンティティにこだわったのに比べて、次第に滞在先の文化に同化していき、最後にはどちらの文化にも拘泥せずに自分は自分というスタンスになっていく現象が見いだされた」という話を聞くことができた。

脱文化、あるいは究極の個人化、個別主義とでもいったらよいのだろうか。文化的カテゴリーの対立を乗り越えて、いいかどうかは個人の感覚でとらえるんだという世代が発生し、民族的な区分に執着しないという現象は、文化的交錯の中における「個人」のありようとして興味深い。差異を意識したうえで協調するのか、それともより大きな、より意味の強い価値観の中に区分の意味を希薄化していくのかという選択を、個人レベルで行った層と解釈できるのではないだろうか。その心理的バランス、満足感や幸福感の生成過程、周囲との関係性などはどのようになっているのか。「個人」という視点がどう機能しているのか、先の健康問題における個人の選択の論点と併せて考えてみるとよいかもしれない。

そして人類学者のいうことには、「そもそも、文化によって違うということを言いたるだけでは、だめな時代なのではないか。欧州では、文化相対主義をご都合主義的に使い始める動きもある。自分たちの民族的独自性を大事にするから、移民は歓迎できないとする主張がある。違いの尊重は拒否の理由づけになりかねない。それを越える論理が必要で、そこが現在の重要な課題なのではないか」とのことであった。

かつては自文化中心主義から文化相対主義へ価値観を変えよといわれ、今でもこれは一般論としては否定はされないだろう。しかし相対的な価値を大事にするがゆえに、「混じり合えない」という結論もあり得るといっているのである。これは、心理学が文化のバリエーションを整理していくだけでは、彼らが切実に意識している、この今日的問題の解決には貢献しないのでは、という問いかけでもある。

これは、共生のための工夫やその成立メカニズムといった、積極的に肯定的結果を生み出すための研究視点をもっと持つべきだという示唆かもしれない。争いや偏見のからくりだけでなく、要素の絡まり合っていくダイナミクスを扱うことができる心理学の特徴を生かせば、より生産的な動きをバックアップする知見をもっと提供できるかもしれない。この視点は、肯定的な現象を生み出すことを目指すという意味で、最近のいわゆる「ポジティブ・サイコロジー」の流れに組み入るものだろう。共生の利点はどこにあるのか、痛みを越えてそれを目指すとしたら何をモチベーションにしているのか。人間の、辛いことは嫌で、違うことも嫌で、変わることも厭わしいといった本音を抱えてもなお、共生を目指す心の仕組みがみつかるのかどうかを、心の内側と外側から、探索する必要があるのかもしれない。

引用文献

- Segall M.H., Dasen P.R., Berry J.W. and Poortinga Y.H. 1990 Human Behavior in Global Perspective: An Introduction to Cross-cultural Psychology. USA: Prentice Hall Inc. (日本語版：シーガル・ダーセン・ベリー・ポータインガ (田中囀夫・谷川賀苗訳) 1995 比較文化心理学 北大路書房)
- Matsumoto D. 1996 Culture and Psychology: People Around the World. USA: Wadsworth. (日本語版：D. マツモト (南雅彦・佐藤公代訳) 2001 文化と心理学 — 比較文化心理学入門 — 北大路書房)